

ごあいさつ

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが発足して以来、これまでの研究調査活動を通じて、じつに多くの人たちとの出会いがありました。研究とはまさに、出会いの積み重ねでもあります。

2006年9月、ケルン大学のフランチスカ・エームケ先生によって、はるかオーストリアから衝撃的な文化遺産が私たちにもたらされました。それが本報告書でとりあげた、エッゲンベルク城博物館所蔵「豊臣期大坂図屏風」です。

この屏風は、豊臣期の大坂城とその城下を描いた作品です。豊臣大坂城を画題とする屏風絵は、わずか4点が伝存するのみでした。それだけに繁栄する平和時の大坂の様子を描いた本作品の歴史的・美術史的価値は、はかり知れないほど高いものです。

この「豊臣期大坂図屏風」をめぐり、関西大学とオーストリア・シュタイアマルク州立博物館ヨアネウム、大阪城天守閣の3者間で、共同研究協定が締結されました。協定の中には、研究成果を市民の皆様に広く還元するために国際シンポジウムを開催することが含まれています。

私たちは、2007年9月に2回の国際シンポジウムを企画いたしました。9月28日のシンポジウムでは、この屏風絵がいつ、なぜ、どのように日本からオーストリアへ渡ったのかという問題を議論し、29日のシンポジウムでは、「豊臣期大坂図屏風」に描かれたさまざまな情報を読み解くことをテーマとして掲げました。

「豊臣期大坂図屏風」は新発見されてまだ間もなく、多くの謎を秘めています。これから研究が進むにつれて、一層その価値を高めていくことでしょう。

本報告書を通じて、「豊臣期大坂図屏風」の未知数の魅力をお伝えすることができましたら幸いです。

2009年3月31日

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター長
高橋 隆博